

PISA型学力の根底となる学力観『キー・コンピテンシー』とは何か（II）

—これからの社会で求められる能力とは何かを考える—

開倫塾

塾長 林明夫

Q 1 : 先月に引き続きお聞きします。「キー・コンピテンシー」とは何ですか。

A : (1) OECD（経済協力開発機構）が、2000年から行っているPISA調査（15歳時国際標準学力調査）の「根底」となる「学力観（学力とは何かについての考え）」です。

(2) OECDは、PISA調査を計画すると同時並行して、「これからの社会で求められる能力とは何か」について、OECD加盟国の教育政策担当者を総動員して、大規模な調査・研究を実施。

(3) 日本では文部科学省、とりわけ、教育政策研究所、各都道府県教育委員会が総力を挙げて協力しました。その結論である「キー・コンピテンシー」に基づき行われているのがPISA調査です。



Q 2 : 「キー・コンピテンシー」は、日本の教育とどう関係するのですか。

A : (1) 今回の、10年に一度改定され、2020年度から小学校・中学校・高校と順次施行されている「新学習指導要領」とは何か。

(2) 日本政府が20数年間協力し続けているPISA調査と、その根底となる学力観である「キー・コンピテンシー」の調査・研究を最も参考にして、策定されたものです。

(3) ですから、2020年度の新学習指導要領は、「キー・コンピテンシー」の具体化を目指すものと考えます。

Q 3 : なぜ、林さんはそのように考えるのですか。

A : (1) 実は、開倫塾は、2000年に入って間もなくから、OECDのIMHE（高等教育管理）プログラムの正式メンバーとして、OECDの様々なプログラムに10数年間参加していたためです。

○プログラムは数年前に終了しました。

(2) IMHEの一番近い部署がPISA部門でしたので、「キー・コンピテンシー」の調査・研究の報告やセミナー・シンポジウムに何回も参加させていただき、とても勉強になりました。

(3) 日本では明石書店から「日本や世界の教育政策分析」や「キー・コンピテンシー」関係の本がどんどん出版されましたので、大いに勉強させていただきました。

○2022年からの新学習指導要領はOECDの教育政策の調査・研究、とりわけ、PISA調

査や、「キー・コンピテンシー」の研究成果を踏まえた素晴らしい取り組みと、高く評価させていただきます。

Q 4 : 「キー・コンピテンシー」は、どのような内容ですか。また、それが必要な理由は何ですか。

A : 「キー・コンピテンシー」は3つあります。

(1) 第一は「相互作用的に道具を用いる能力」です。その内容は

- ① 「言語、記号、テキストを相互作用的に用いる能力」
- ② 「知識や情報を相互作用的に用いる能力」
- ③ 「技術を相互作用的に用いる能力」

*これが必要な理由は

- ① 「技術を最新なものにし続ける」
- ② 「自分の目的に道具を合わせる」
- ③ 「世界と活発に対話する」



(2) 第二は「異質な集団で交流する能力」です。その内容は

- ① 「他人とよい関係をつくる能力」
- ② 「協力する、チームで働く能力」
- ③ 「争いを処理し、解決する能力」

*これが必要な理由は、

- ① 「多元的社会の多様性に対応する」
- ② 「思いやりの重要性」
- ③ 「社会的資本の重要性」



(3) 第三は「自律的に活動する能力」です。その内容は

- ① 「大きな展望の中で活動する能力」
- ② 「人生設計や個人的活動を設計し実行する能力」
- ③ 「自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力」

*これが必要な理由は

- ① 「複雑な社会で自分のアイデンティティを実現し、目標を設定する」
- ② 「権利を行使して責任を取る」
- ③ 「自分の環境を理解してその働きを知る」

Q 5 : 「キー・コンピテンシー」の核心は何ですか。

A : (1) ふりかえって深く「考える力」「省察 (reflectiveness、リフレクティブネス)」による人生への思慮深いアプローチ (反省性) が、「キー・コンピテンシー」の核心です。

(2) 「もともと、コンピテンスとは、複雑な需要に応じる能力であったから、その核心となる概念に、人生への思慮深さ、ふりかえって考える力 (反省性) が置かれるのは当然のことである。考える力を中心として、自律的に活動し、人間関係を作り、そのため道具を活用して、成果を生むのが、『キー・コンピテンシー』というわけである」

(3) 「3つのコンピテンシーは、別々に機能するのではなく、各コンピテンシーは、他のも



の基礎となり、深い関連を持つ」

*以上、立田慶裕著「キー・コンピテンシーの実践、学び続ける教師のために」明石書店
2014年3月28日刊39～41ページより引用させていただきました。

Q6：林さんは、この「キー・コンピテンシー」について、学校などでどのように話しているのですか。

A：(1) 会員として所属する経済同友会（東京）、栃木県経済同友会、群馬経済同友会の活動として、毎月数回、中学校や高校、大学、大学院、教育委員会などで出張授業を依頼されたときは、必ず、「これからの社会で求められる能力とは何か」をお話する際に、「キー・コンピテンシー」の内容を次のようにお話しています。



*ただし、「キー・コンピテンシー」という語句は、難しいので使いません。

(2) ①これからの社会は、知識基盤社会です。そこで求められる能力は、「知識・情報・技術を相互作用的に用いる能力」です。

②これからの社会は、「グローバル化社会」です。そこで求められる能力は、「多様な集団で交流する能力」です。

③これからの社会は、課題山積（さんせき）社会です。そこで求められる能力は、「自律的に行動する能力」です。

(3) 「キー・コンピテンシー」の前提条件は、文章や情報を正確・論理的・分析的に読み解く力「読解力」です。その「読解力」を身に着けるには、「辞書に親しむことによる語彙力」「読書による思慮深さ」「新聞による自分で考える力・批判的思考能力」を育成することが大切であるということなどを、できるだけわかりやすく、具体的に、お話しています。



Q7：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1) 先生方も、ご自分の学校や塾の児童・生徒・塾生の皆様に、「これからの世の中で求められる能力とは何か」をぜひお話してください。

(2) そして、どのようにしたら、その能力を育てることができるかを、「キー・コンピテンシー」を参考に、ぜひお考えください。

(3) 2022年度から高校で導入された「探究型授業」は、「キー・コンピテンシーの育成」を目指したもので、画期的です。大学進学を目指す普通科高校が、「探究型授業」で活気づいてきました。「地域社会の課題解決」も「探究型授業」の大テーマになりますので、「地元理解」が進み、「地元大学進学者」「地元就職者」がどんどん増え、「地域創生」にも役立っています。

○ 2022年から10年間、日本の教育改革は、「キー・コンピテンシーの育成」のために行われると考えます。素晴らしいことだと、高く評価します。これからの10年が、「キー・コンピテンシー」の出番、本領発揮の時代です。日本なりの「キー・コンピテンシー」を大研究し、実行に移しましょう。

Q 8 : 最後に一言どうぞ。

A : 僭越ながら、今月も先生方がお読みになれば参考になる本をご紹介しますので、いただきます。



(1) 1冊目は、本文で引用させていただいた、立田先生の「キー・コンピテンシー」の関連図書や、OECD の日本及び世界の教育政策の調査研究報告書で、明石書店からたくさん出版されています。検索し、ぜひじっくりお読みください。

(2) 2冊目は、小牧治著「和辻哲郎」清水書院、人と思想、センチュリーブックス 1986 年 12 月 20 日刊です。長年、和辻哲郎著「古寺巡礼」「風土」「鎖国(上・下)」などを取り出せば、行きつ戻りつしながら読んでいましたが、小牧先生の本著を読み、和辻哲郎の全体像が理解できました。もう一度、「和辻哲郎」を読み直しています。

○本を読むときには、著者が全力投球した力作を連続して読むと同時に、その著者についての入門書をうまく組み合わせると、理解が進みます。



(3) 3冊目は、森有正著「生きることと考えること」講談社現代新書、講談社 1970 年 11 月 16 日刊です。「バビロンの流れのほとりにて」「木々は光を浴びて」「遥かなるノートルダム」「旅の空の下で」「荒野に水湧きて」(いずれも筑摩書房刊)などを何年かかけて、やっとの思いで読み続けた後、本著を読むと、森有正氏のおっしゃる「経験とは何か」が本当によくわかります。

○本を読む場合には、著者の本格的な単行本と、口述筆記の新書版などをうまく組み合わせながら読むと、よく理解できてありがたいです。

(4) 4冊目は、ツルゲーネフ作、米川正夫訳「初恋」岩波文庫、岩波書店、1933 年 4 月 15 日刊です。ロシアによるウクライナ侵攻が進む中、ツルゲーネフやドストエフスキー、トルストイ、チェーホフなど、昔親しんだ作品が、なぜか思い出され、懐かしく思います。米川正夫訳「初恋」は、しみじみとした素晴らしい作品です。ぜひご一読を！

2022 年 12 月 8 日記